

特集 関節鏡(内視鏡)のエキスパートを目指そう

introduction

関節鏡は日本が誇る医療機器の一つで、1950年代に東京通信病院の渡辺正毅らにより開発され世界に広がりました。鏡視は膝関節から始まりましたが、手術手技の進歩のみならず、デバイスやディスプレイなど機器の開発・改良により、現在は脊椎ならびにすべての関節の診断などさまざまな診療に役立っています。関節鏡はレジデントが骨折治療と同様にまず興味をもち、基礎的な手技を習得し患者さんの早期復帰を目の当たりにします。そして、エキスパートの手技を見ることで、治療の幅は広がりますが思わぬ合併症に出くわすこともあり、より自己研鑽を積みたくなります。以前、本誌2015年11月号(Vol.34 No.11)で、「レジデントのための関節鏡－ポイントと合併症－」が特集されました。本特集号では、そのときの読者たちが、関節鏡のテクニック、コツやピットフォールをより学び、関節鏡のスペシャリストに少しでも近づくことを目的に企画しましたので、テーマを「関節鏡(内視鏡)のエキスパートを目指そう」としました。

現在、臨床の最前線で活躍されている指導医の先生方にお願ひし、関節鏡のエキスパートを目指す医師ならびにメディカルスタッフにとって必要なエッセンスを中心に執筆していただきました。

実際の関節鏡・内視鏡を実施する際の体位(牽引などの器具)、術中操作(ポータル、手技など)、術後に関し、「テクニックやコツ」のポイントについてイラストを多用し、術後成績や合併症ならびに手技上のピットフォールと不測の事態の対策についても簡潔にまとめていただきました。「総論」では、関節鏡(脊椎内視鏡)のテクニック、コツ、ピットフォールを概説していただいています。また「各論」では、脊椎(頸椎、腰椎)と関節(肩関節、肘関節、手関節、股関節、膝関節、足関節)のテクニックやコツならびにトピックスなど治療手技に関するホットな話題を取りあげていただきました。読者が関節鏡のエキスパートを目指すうえで必要な手技などは、各々の項を熟読することで診療の一助となるものと考えています。ただし、誌面の制約上、また現在開発中のためとりあげることでできなかったインプラントや器具もありますことを御容赦ください。

また本号は、「イラスト・写真・画像」を多用した大変わかりやすい内容になっています。関節鏡専門医のみならず、関節鏡に興味・関心のある医師・メディカルスタッフを含めたすべての医療関係者にとって意義のある一冊になったものと考えています。

最後にご多忙のなか、本号にご執筆いただきました先生方にあらためまして深謝するとともに、本号が関節鏡・脊椎内視鏡をする際に傍らに置かれ、読者の皆様のお役に立つことを祈念し序文の挨拶と致します。

宮崎大学医学部整形外科

帖佐悦男